

トピックス

日本肥満学会主催 第1回肥満症サマーセミナー 特集 その2

ワークショップ 肥満症Q & A

*前号(Vol. 9, No. 3)に引き続き、今号でも第1回肥満症サマーセミナーワークショップ「肥満症Q&A」から興味深い討論を取り上げ、掲載いたします。

- Q：(1) 超肥満者では、骨髄あるいは脾臓の脂肪細胞にも変化がみられるのでしょうか。また、体内の脂肪細胞の違いと体型には関係がありますか。
- (2) 骨粗鬆症は、肥満の方ほどなりにくいといわれていますが、そういう観点からしますと、むしろ肥満というのはよい効果もあるということになります。これはどのように考えたらよいのでしょうか。

坂田(中村学園大学) ご専門の奥田先生、いかがでしょうか。

奥田(熊本県立大学) (1)のご質問についてお答えいたします。骨髄などには確かに脂肪が溜まってきますが、おそらくこの現象は肥満とは直接は関係がないのではないかと思います。つまり赤血球などを作る機能が終わったところに脂肪が溜まっていくという状態は一般的に起こる現象で、特に肥満になったらそれが助長されるということはないと思われます。

坂田 現在、エビデンスとしてはハッキリとしたものはありませんね。興味があるのは、肥満者では高レプチン血症なので、そのレプチンが骨髄の造血幹細胞に働いて、赤血球などの産生、分化を誘導するのではないかと、このことと骨髄の脂肪化との関係です。もっ

とも、肥満者の場合、このレプチンによる造血幹細胞への働きもレプチン抵抗性で阻まれるのかどうかはわかりません。ただ、末梢作用なので可能性は少ないとは思いますが、骨髄へのレプチン作用は肥満者でも考えられますか。

奥田 その可能性は否定できないと思います。

坂田 (2)の質問の骨粗鬆症についてはどうでしょう。

奥田 更年期に入ると、肥満の方が、女性ホルモンなどを体内にキープした状態になります。肥満の方がやせようとする、甲状腺ホルモンが脂肪細胞のなかに放出されますので、女性ホルモンの低下がみられ、骨粗鬆症になりやすくなります。肥満の方はそのような女性ホルモンの低下が少ないので、骨粗鬆症などにはならないです

むという可能性は十分あると思います。

坂田 (1)(2)の質問に関連しますが、脂肪細胞の発生という観点からしますと、普通、培養して放っておくと脂肪細胞には分化せず、線維芽細胞だけになりますね。

奥田 線維芽細胞から脂肪細胞に変わるのですが、ではどの部位の線維芽細胞でもそうなるかといいますと、そうではありません。脂肪組織の線維芽細胞は脂肪細胞になっていきますが、他の部位の線維芽細胞は、どんなに培養しても脂肪細胞にはなりにくいという状況があります。ですから、同じ線維芽細胞であっても、脂肪細胞になり得る細胞と、なりにくい細胞という区別があるのではないかという感じがします。